



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	奥寺龍溪のボーイスカウト論に関する研究：英国規範の受容とアダプテッド・アスレティズム [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	石立, 克己
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第16306号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95222
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	ISHIDATE_Katsumi_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学） 氏名：石立 克己

主査	教授	池田 恵子
審査委員 副査	教授	近藤 健一郎
副査	准教授	崎田 嘉寛
副査	講師	山崎 貴史

学位論文題名

奥寺龍溪のボーイスカウト論に関する研究

—英国規範の受容とアダプテッド・アスレティシズム—

本論文は、奥寺龍溪（1877－1936 年）のボーイスカウト論を通して、英国的スポーツ規範の日本的受容の在り様を明らかにするものであった。奥寺の著作の分析は、ボーイスカウト運動が内包する英国的スポーツ規範、アスレティシズムの階層縦断的及び文化横断的拡大への着眼につながる。そもそも 19 世紀後半の英国パブリックスクールのスポーツ教育思想、アスレティシズムは克己心や自己犠牲、協調性といったスポーツ規範の普遍性に関する研究、社会ダーウィニズムの影響下で帝国主義戦争に加担した負の側面への関与を明らかにする際に言及されてきたが、社会教育を通じたアスレティシズムに関する研究は日本ではこれまでなされてきていない。奥寺はボーイスカウト日本連盟の前身、少年団日本連盟（1922－1941 年）にて主事、参事、健児部国際班長を務め、100 編を超えるボーイスカウト論、6 冊の単著を執筆し、初期のボーイスカウト教育の理論形成に貢献した人物として知られている。にもかかわらず、奥寺に関する体系的な研究はこれまでなされてきておらず、その意味で本研究は研究史の空白を埋める部分をなすが、それ以上に前世紀転換期のアスレティシズムの可塑性を分析する際の近年の手法、C. Hickey の言う「アダプテッド・アスレティシズム」の検証につながっている。この概念は中流上層階級から労働者階級へと階層縦断的な伝播の際に消化された「市民教育としてのアスレティシズム」が大英帝国の外へと

拡がる過程、横断的な伝播の際に生じた足跡としてのボーイスカウト論を捉えるという分析視角を意味する。

本論文は第一部と第二部から成り、「第一部 ボーイスカウト運動と奥寺龍溪」では、第一章において、奥寺が中等教育段階ですでに英国国教会系の夜学を通じて英国の市民教育に触れ、ボーイスカウト運動に傾倒するに至ったこと、運動を通じたアスレティシズムの変容と拡大過程について論じ、以後の章との接続をなしている。第二章では、青年団中央部発行の定期刊行物『帝国青年』（1916-1922年）の分析を行い、奥寺のスカウト教育論の形成過程を明らかにし、「第三章 『列強少年の社会教育』（1923年）にみるスカウト・ゲーム及び「遊技」に関する研究」では、スカウト・ゲーム、「遊技」を重視した奥寺のスカウト教育論を明らかにしている。以上は、英国スポーツ規範と公民教育との関係、その具現化は遊技に根ざすという奥寺のボーイスカウト論の解明につながっている。

第二部「国際主義と奥寺龍溪」では、大英帝国の外で展開された水平方向の問題も合わせて論じ、第四章において、奥寺著『ボーイスカウトの精神』（1922年）及び「採用か脱化か」（1933年）を通じて、奥寺が英国の市民教育に根ざす国際主義理念の定着を試みたことについて論じている。第五章では1934年から1936年にかけて『少年団研究』に掲載された奥寺による連載「訓練の組立」、「訓練の仕組」を分析し、少年団日本連盟内部に国家権力が介入する最中において、ヒットラー・ユーゲントを痛罵し、遊技概念を基調とする英国の「ボランティア主義の伝統」に基づく自主性の強調を捉えて、ファシズムへの抵抗について論じている。

以上より、本研究の独自性は以下のように総括できる。第一に初期のスカウト運動の理論形成に貢献したとされてきた奥寺研究を体系的に進めた。第二に、奥寺の著作の詳細な検討を通じて、日本のボーイスカウト運動を通じた公民教育としてのアスレティシズムの側面を明らかにし、「英国のエリート教育機関からのアスレティシズムの伝播」という従来の説を超え、階層縦断的かつ文化横断的なアダプテッド・アスレティシズムの日本的位相を捉えた。加えて、少年団運動が国粹主義化する時期の分析により、彼の国際主義が単なる英国の模倣や普遍主義、ファシズムへの迎合でもなく、スカウト訓練を通じた「独自の国際主義」、遊技教育を基礎とした近代の自治のしくみを教授するものであったことを明らかにしている。とりわけ、「余暇の訓練」、「深奥難解の科学ではなく、愉快で教育的なゲーム」という遊技による教育へのこだわりが奥寺の教育論の核心にあり、この信念は彼の国際平和主義とも一体のものであったとされている。

以上は、学術上の新たな知見をもたらしたが、高度な論点整理が必要とされ、査読者からはよりわかりやすい記述に心がけ、先行研究を補足し、語句説明、用語の統一、論理、方法論の明示化等の細やかな指摘がなされた。著者はそのひとつひとつに丹念に答え、なおも文体の洗練に課題を残しているが、本論文が公開されなければ、未解明のままである新たな視点の重要性を認め、学位論文に相当する学術的見解が示されているという点で一致した。よって著者は北海道大学 博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。